

ごっこ遊びの研究

1・2歳児のごっこ遊びと援助のあり方

田 口 鉄 久

家政学部家政学科家政学専攻

(2003年9月11日受理)

A Study of a Sociodramatic Play

Support for a one and two - year - old children's Sociodramatic Play

Department of Home Economics, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu City, Japan (〒501 - 2592)

TAGUCHI Tetsuhisa

(Received September 11, 2003)

. 目 的

幼児期の代表的な遊びであるごっこ遊びは、幼児の諸能力の発達と絡み合って、4・5歳時期にもっとも盛んに展開される。ごっこ遊びの基礎となるイメージする力の現れは、一般に1歳半ごろと言われている。

1・2歳児期の幼児は身体諸能力の発達と共に、さまざまな事物・場所等に興味を持ち、未知への関心から探索活動を始める。今井和子(1992)は活発な探索活動から象徴遊びが生まれることを幼児の行動が変化していく事例から説明している。探索活動が、幼児のイメージする力をさらに豊かにするというのである。

1・2歳児期の中心的な遊びは探索活動であるが、探索する背景には予測や期待があり、イメージの遊びであるごっこ遊びへの準備がなされる活動・遊びである。幼児は身近で親しい人との生活を通して印象深く残った事柄をイメージとして心に描きながら、初期のごっこ遊びをし始める。この時期のごっこ遊

びは、見立て遊び・ふり遊び・つもり遊びなどといわれる1人もしくは2・3人のごっこ遊びである。

本研究はこれら初期のごっこ遊びの実態を明らかにすると共に、どのようにして仲間とイメージが共有され、後の集団的・組織的なごっこ遊びにつながっていくのか、観察事例を基にして検証するものである。また、その際保育者として初期のごっこ遊びはどのように援助すべきか併せて検討するものである。

. 方 法

三重県河芸町Y保育園(私立)1歳児ならびに岐阜市K保育園(私立)2歳児の自発的な遊びを中心とした見立て・ふり・つもり遊びを初期のごっこ遊びととらえ、参加観察法によって筆記記録した。

Y保育園は2003年6～8月、K保育園は7～8月両園とも3回ずつ、計6回訪問した。

いずれも午前10時ごろから1時間～1時間半の観察であった。この時間帯は主に保育士の援助・見守りの中、幼児が室内または戸外

で自由に遊ぶ時間である。

ごっこ遊びにつながる遊び場面の記録は23事例あった。そのうちここでは14事例を取りあげた。事例中のアルファベット小文字は女児を、大文字は男児を表す。保育士は該当園の担当保育士を、観察者は筆者を表す。

・ 結果と考察

1. 幼児は自分のイメージする遊びに他児(他者)も共に参加していると考えている。

<事例1> 1歳児 7/18

m児 布製の皿を2枚持ってきて、それぞれの上にティッシュを丸めて乗せ、「おいしー、おいしー」と言う。観察者に対して食べて欲しそうにする。

観察者 「いただきます」と言って食べるまねをする。

m児 その後手揚げバッグにティッシュと皿を入れ、別の家へ運んでいく。再び戻って同じように並べ直し「おいしー」と言い、両手を合わせて「いただきます」のしぐさをする。

<事例2> 1歳児 8/8

m児は保育士に作ってもらったツリー状の新聞紙を手にして、“枝”をひらひらさせていた。ままごとのコーナーへ来てN児の遊んでいたテーブル(箱)の上にツリーの枝部分の紙を3片ほど破って「どーぞ」と言って置く。N児はそのことには関心を示さなかった。

<事例3> 1歳児 7/18

s児 砂場の中に置かれた移動できるテーブルに砂を入れたカップを置き、いすに座り、ご馳走を食べるような雰

囲気で座っている。しばらくして、そのカップを持っていすから降り、「オッ、オッ、オッ」とテラスに腰を下ろしている観察者のところへ運んでくる。「アッ、アッ、アッ」と2歳児のクラスを指差す。

観察者 「うた歌っているね」

s児 「・・・てよ」とカップを示す。

観察者 カップを持って「シュッ、シュッ、シュッ」と食べるまねをする。

s児 その後何度もカップを差し出して、観察者に食べるよう求めた。

【考察1】

<事例1>でm児はティッシュを食べ物に見立て、近くにいる観察者に差し出し、食べることを求めた。また、同じように自分も食べるふりをした。<事例2>でm児は新聞紙で作ってもらったツリーの枝部分を3片ほどちぎって近くにいたN児の前のテーブルに置いたが、N児は関心を示さなかった。<事例3>でs児は食べることを何度も相手(観察者)にすすめ、自分と一緒にイメージで遊ぶことを求めた。いずれの場合も本人は遊びとしてのイメージをはっきりもっているが、自分の周りにいる相手も同じようなイメージをもっているもの(もつべきもの)と考えているようで、自らの思いのまま遊びをすすめている。

2. 保育者が幼児の遊びイメージを受けとめることによって、他児へそのイメージをつなぐことになる。

<事例4> 1歳児 7/25

Y児 保育士にケーキを渡す。

保育士 「イチゴのケーキ、パクパクパク」
「Yちゃんも半分パクパクパク」
ケーキを差し出す。

Y児 食べるふりをする。
保育士 「Uちゃんも半分パクパク」とケーキを差し出す。U児も食べるふりをする。
保育士 「おいしいーい、ね」
s児 近くにいて自分で食べるふりをする。

<事例5> 1歳児 7/18

a児 青と緑の小さなボールを持ってくる。(観察者に差し出すので、手にする)
a児 小さな水色の手提げバッグを持ってきて「これ」と言い、入れてほしそうにする。
観察者 「入れるの？」
a児 「入れて」おみやげ・・・」と言って離れていく。しばらくして更に大きい手提げバックを持ってくる。大きな手提げバックの中へ小さなバッグを入れようとするが、うまく入らないため、手伝ってほしそうにする。手を貸して入れてやる。すると、手作りの室内滑り台へ行って一滑りして戻り、そのバッグの中のボールを見せて、食べてほしそうな表情をする。
観察者 「いただきます」と言って食べるまねをすとうれしそうな表情になる。
s児 同じように手提げバッグを持ってきて中のボールを取り出し、「おみやげ」と言う。
観察者 「パクパク」と言って食べ終わり、「ありがとう」と言う。
s児 残りのもう一つのボールを指差すので、それも「パクパク」と食べ、「ありがとう」と言う。

【考察2】

<事例4>ではY児の差し出すケーキを保育士が食べて、その半分をY児にも食べるようすすめ、近くにいたU児にも食べるようすすめている。その様子を見てs児も自ら食べるふりをした。保育士の関わりは幼児同士のイメージの共有を促すものであり、後の組織的なごっこ遊びにつながっていくものと考えられる。<事例5>ではa児が手提げバッグに入れた小さなボールをおみやげに見立て、観察者に食べてもらったことに触発されて、s児も同じような行為をした。

言葉で説明することの少ない1・2歳児は保育者が幼児の行動の意図を読み取り、言葉化させることが他児へ遊びイメージを伝えることにつながる。

3. 他児が行う日常生活に関する見立て・ふり行為に触発されて、自らも同じように行ってみようとする。そこで、互いのイメージがつながりあうことの楽しさを経験する。

<事例6> 1歳児 7/18

s児 ダンボールを補強して布を張った大きな家へ入り、牛乳パックを組み合わせてつくった小さなベッドに横になり、小さな布団をおなかに乗せて眠るふりをする。
a児 s児の様子を見て、自分も別のベッドに横になる。キティちゃんの人形を抱いたり、横に置いたりして一緒に寝ようとする。すぐに自分は起き上がって座り、伸ばした足の上に布団を置き、その上でキティちゃんの人形を寝かそうとして「ねーんね、ねーんね、ねーんねー・・・」と歌い、自分の体を揺らしている。その後入れ替わって、キティちゃん

の人形をベッドに移し、自分は中央に座り、キティちゃんの人形ををトントンした。となりで寝ているs児へも手を伸ばしてトントンしてやった。

s児 寝ているふりをしているが「キャッキャ、キャッキャ」とうれしそうに声をあげた。

<事例7> 1歳児 7/25

a児 T児とダンボール(布張り)ハウスの屋根にままごとの布団を干している。

4枚干し終わると、うれしそうに手をたたく。二人とも満足げ。

a児 ピエロの人形をベッドに寝かせ、布団をかぶせる。

T児 同じように熊を寝かせ布団をかぶせる。続いて布団ごと抱っこして揺らす。またベッドに寝かせる。今度はハンカチを上布団にみなし、かぶせる。

a児 ピエロの人形を抱いて、(幅広の)ついたての上に寝かせ「ねんねー、ねんねー」と言う。

a児 布団に包むようにしてピエロの人形を抱き、揺らす。

<事例8> 1歳児 8/8

m児 すし一個を布製の皿にのせて「あむ、あむ」と食べるふりをする。

何も入っていない皿から、すし(?)をつまむふりをして観察者に食べさせるふりもする。

m児 「ニンジン」とつぶやきながら「どぞ」

観察者 「シュルシュル、おいしー」

m児 「おせんべ」たいた(意味不明)」か

ぐ(意味不明)」おいしー？」

a児 皿を洗うふりをする。(おすしがタワシの役目をしている)

a児 こんどは手だけで皿を洗うふりをする。「ゴチゴチ、ゴシゴシ」

観察者 「きれいね」

a児 「きれい」

m児 スカートとエプロンを持ってきて、「して」と言うので着せてやる。

a児 同じようにスカートとエプロンを持ってくるので着けてやる。「ハッピー、ニューニュー、ハッピー、ニューニュー」と繰り返し歌っている。(ハッピーバースデーの歌のようにも聞こえる)

a児 すし、おむすびを皿に入れて、観察者に「どぞ」と差し出す。観察者は受け取って食べるふりをする。

m児 同じように「どぞ」言って渡してくる。観察者はこれも食べるふりをする。

【考察3】

<事例6>ではs児の行為をまねてa児が自分のイメージで“寝る”遊びを行うが、s児にも自然に関わり、一緒に“寝る”ごっこ遊びを行っているかのようにみえる。<事例7>は日常生活で見られる布団を干す、赤ちゃんを寝かすという興味ある場面を、あたかも母親になったつもりでa児・T児が同じようなイメージをもって行っている。<事例8>ではm児・a児の二人が食事ならびに片付け場面の遊びをした後、エプロン等を身に付けて、さらにごっこ遊びとしての雰囲気浸ろうとしている。また、誕生会という非日常の楽しかった思い出も併せて遊びとして実現させようとしている。

4. 自分の遊びのイメージを言葉や行為で
他児に伝えて、イメージを共有して遊ば
うとする。

<事例9> 2歳児 6/20

C児 「くわがたむしのごはん」と言って、
クワガタの形をしたプラスチック型抜
き容器に砂を入れている。近くにいる
M児に対して

C児 「じゃあなかまにしてやるか？」

M児 「うん」

C児 「(クワガタの型抜きを)あずかっ
てよ、nちゃん！」 n児は無言。

C児 「ただいまー、ただいまー、これだ
んごむし」

C児 「ただいまー、ただいまー」

n児 「おかえり」

<事例10> 2歳児 6/20

O児 なべに砂を入れて、スコップでとんと
ん突いたりしながら混ぜている。

O児 近くへきた子に「おかえりー」と言う。
近くへきた子は「まぜよー、いれる
よー、ざー」と手で砂をつかんでなべ
に入れたり、スコップですくって入れ
たりした。

O児 「yちゃん、ごはんのよういしとるよ」
と伝える。y児は一人で熱心に容器に
入れた砂を混ぜている。

C児 「これしお、おかあさんしかたべれな
い」まぜてチーンしよ」

K児 「なにやってるの？」

C児 「けーきやさん」

C児 「yちゃん、ごはんやさんやる？」相
変わらずy児は一人で熱心に容器の砂
を混ぜている。

C児 「yちゃん、ねー、お買い物に行っ
てきて、ぱんぱん(パンの意)買って

きて！」

y児が行かないとみたC児は自分で出
かけ、「ただいまー」と言って帰る。

y児 「おかえりー」とつぶやくように言う。

【考察4】

<事例9>では2歳児は1歳児に比べ格段
に言葉が豊かになっていることがわかる。言
葉を通してイメージの共有や調整を行う姿が
みられる。“平行遊び”的ではあるが、一部
の場面を共有しあう様子が、M児への誘いの
言葉やn児に返事を求めるC児の姿からわか
る。<事例10>は“ごはんやさん”のイメー
ジでO児とC児がごはんを作っている。近く
で同じような遊びをしているy児にも仲間
に加わってほしいようで、盛んに誘いかけを
している。また、仲間入りしようとするK児の
姿も見られるなど、ごっこ遊びの原型が出て
いるように思える。

5. 現実とイメージの世界とは明らかに違
うということ意識していて、ゆとりを
もってイメージの世界で演じることを楽
しんでいる姿がみられる。

<事例11> 2歳児 7/4

給食準備の前、e児がテーブルの上に月刊
絵本を広げ、見ている。皿に盛り付けた食
物(おかず)の絵をじっと眺めていたが、し
ばらくするとそれをつまみ、口の中へ入れて
食べるふりをした。

観察者 「おいしい？」と聞くと、少し戸惑っ
たようだったがe児は観察者にも食
べ物をつまむふりをして差し出し
た。

観察者 「もぐもぐ、ああおいしい」

<事例12> 2歳児 8/1

円形ビニールプールで遊ぶ。

F児 「おじさーん、たすけてくれー」おじさーん、たすけてくれー」水の中に倒れこんで叫んでいる。

観察者 「だいじょうぶかー」だいじょうぶかー」

F児は大水の中で大変なことになっていることを表現しているようであった。

【考察5】

<事例11>のe児は現実とイメージの世界を区別しているが、一人でふとイメージの世界へ入って、食べるふりをした。観察者が声をかけたのにあわせて、イメージの世界にとどまって演じた。<事例12>ではF児は自分が架空の世界で大変な事態に陥っていることを、近くにいた観察者に演じて見せている。両事例とも、イメージの世界で遊ぶことの楽しさをわかった幼児が、ゆとりをもって表現している行為と言える。

6. 保育者の働きかけで皆が同じようなイメージをもって、遊びや活動を楽しむことができるようになる。

<事例13> 2歳児 8/1

プール遊びの前に体ほぐしの体操をする。保育士の言葉かけでドングリになって転がったり、「カメさん、ゾウさん、ゴリラ」になって「おててふりふり、おしりふりふり、おててぶらぶら」などの表現遊びをする。

<事例14> 2歳児 8/1

i児 「おばけやしきにいくの」

観察者 「そう？(何を意味しているのかわからなかったためあいまいな返事をした)

おやつが始まる少し前の時間、保育士に絵本を読んでもらう。園児がきもだめしをする絵本であった。絵本を読んでいる途中に、保育

士に促されて

みんな 「えんちょーせんせー、きてくださーい」声をそろえて言う。

みんな 最後に「やったね」と声をそろえて言う。

絵本の世界で愉快的・スリルのあるきもだめし体験を皆でする。

利用絵本「おばけなんてこわくない」
中川ひろたか(童心社)

【考察6】

<事例13>ではプール遊びの前の体ほぐしの活動だが、保育士の言葉で皆がそのつどいろいろな動物になって表現を楽しむ。<事例14>では皆でスリルあるストーリーの絵本を読んでもらうことを通して共通の感情体験を持つ。両事例とも皆で大まかなイメージを共有することが、後の集団的なごっこ遊びにつながっていくものと考えられる。

・結論

ごっこ遊びが幼児にとって魅力あるのは、遊びを“自由に変化させる”ことができるからである。つまり、時間・場面を変化させ、役割・行為を変化させ、約束事をも変化させることが楽しいのである。イメージの世界での遊びだからできることでもある(田口鉄久, 2000)。しかし、それができるためには1・2歳児の段階で個々の幼児のイメージする力の育ちと、そのイメージを他児と共有することのできる力が育っていなければならない。

本研究ではごっこ遊びの芽生えともいえる1・2歳児期の幼児の見立て・ふり・つもり遊びを観察し、考察した。その結果1・2歳児のごっこ遊びにつながる遊びの特徴を以下の6カテゴリーに分けることができるのではないかとした。

1. 幼児は自分のイメージする遊びに他児(他者)も共に参加していると考えている。
2. 保育者が幼児の遊びイメージを受けとめることによって、他児へそのイメージをつなぐことになる。
3. 他児が行う日常生活に関する見立て・ふり行為に触発されて、自らも同じように行ってみようとする。そこで、互いのイメージがつながりあうことの楽しさを経験する。
4. 自分の遊びのイメージを言葉や行為で他児に伝えて、イメージを共有して遊ぼうとする。
5. 現実とイメージの世界とは明らかに違うということを意識していて、ゆとりをもってイメージの世界で演じることを楽しんでいる姿がある。
6. 保育者の働きかけで皆が同じようなイメージをもって、遊びや活動を楽しむことができるようになる。

その際の保育者の援助としては幼児がその時点でイメージしていることを受けとめてやること、イメージを他の幼児へつなげてやることをはじめとして、上記の幼児の遊び発達の特徴を把握した関わりが必要である。

今後は1・2歳児のイメージの共有と非共有に関わる観察を重ねて、この年齢段階におけるイメージを伴った遊びの特徴について調べると共に後に盛んになる集団的なごっこ遊びとの関連を調べたい。

参考文献

- 1) 今井 和子 1992 なぜごっこ遊び?
フレーベル館
- 2) 田口 鉄久 2000 ごっこ遊びの援助に関する研究(4) 日本保育学会第53回大会研究論文集
- 3) 高橋たまき 1993 子どものふり遊びの世界 プレーン出版